

珠 洲 だ よ り

2025 年 1 0 月 3 1 日 第 3 号

発行：(公社) 日本医療ソーシャルワーカー協会
珠洲市災害支援チーム



§ スポーツの秋、祭りの秋、実りの秋

風景：蛸島町秋祭り

日々秋の深まりを感じる頃となりました。珠洲では、9 月に入り各町内毎に秋祭りのシーズンが始まり、昨年の秋よりも少しずつ活気を取り戻した様子を感じることができました。美しく大きなキリコ（屋台）を囲む祭りの中に入ると、映画の中に入ったような、異次元の空間に入り込んだような、なんとも不思議な世界に心から魅了されました。また、キリコを囲む人々の表情には力強さが映し出され、この地は必ず復興を遂げるだろうことを実感することが出来ました。(F)

§ 大谷小中学校の運動会に参加して

いしかわソーシャルワーカー・ケアワーカー連絡会
尾角裕美・中本富美

9 月 20 日、雨がぽつぽつ降り始めた中、珠洲市立大谷小中学校運動会が開催されました。全校 4 人の生徒チーム、教職員チーム、地域チームの 3 チームに分かれ、生徒さんが企画提案した種目を競い合いました。一般的な玉入れや給水リレー、借り物競争に“ちょっとした仕掛けと捻り”を凝らした種目にわくわくしながら見入ってしまいました。生徒たちの生き生きとした表情や機敏な動きに圧倒されました。また先生方・生徒たちが精いっぱい力を出せるように運動会を盛り上げ、また地域の方たちの温かい見守りと声援に支えられ、あっという間の 3 時間でした。

このように運動会に参加するいきさつになったきっかけを作ってくださったのは日本医療ソーシャルワーカー協会の福井さんでした。生徒たちを応援したいという思いは単に運動会を盛り上げるためではなく、この珠洲で育つ子どもの未来へのエールも込められての発案だったと思います。

その思いに共感し、昨年から結集した 6 団体で構成される「いしかわソーシャルワーカー・ケアワ

ーカー連絡会」のメンバー8名と北陸学院大学学生さん3名が応援に駆け付けました。学生さんは種目に参加し、大活躍。私達ソーシャルワーカーはうちわや鳴子、鈴、ぼんぼんの応援グッズを振り回しながら、がんばれーの声を張り上げながらの参加でした。6団体のソーシャルワーカーが活動し、感動をともにするという貴重な経験にもなりました。

運動会のスローガン「少数最強」- 運動会の最後にひとりひとりの子どもが「団結力を高め、絆を深められた運動会でした。楽しかったです」のことばに胸が熱くなりました。珠洲の人たちのつながりがいつまでも強く、深いものでありますように…そう願う活動でした。



§ ボッチャ体験会開催

9月30日 石川県ボッチャ協会の方にご指導いただき、予めより計画をしていた、「ボッチャ体験会」を珠洲市健民体育館にて開催することができました。今回は市内全公民館に案内を配布しましたが、市内各地より、20名近くの住民の方に参加いただきました。いくつかの公民館ではすでに「ボッチャ」を始めており、そうした所から「ボッチャを正式に教えて欲しい」といった声や、「他の地区の方と交流したい」との声が聞かれるようになったことが、体験会を開催する切っ掛けとなりました。また、「体育館まではいけませんが、ボッチャをしてみたい。」との声を聞き、ボッチャ協会の方のご厚意から、午後には旧正院保育所まで来ていただき、限られたスペースでのボッチャの楽しみ方を教えていただき、本当に楽しい時間を皆で過ごすことができました。(F)



§ こしひかり 収穫



秋晴れのある日、県外支援者の方と地元の方が一緒に育てている「こしひかり米」の収穫・稲刈りの手伝いをしました。こしひかりの稲は他の品種のものより（匂点取る）背が高くなるため、（匂点付ける）少し強めの雨や風が受けると倒れ易い品種とことから、横になりかかっている稲を手で刈る作業となりました。「もち米も収穫するので、餅つきをするなら米を分けてあげるよ。」とのお声をいただき、現在思案中です。

§ NPO法人ピースウィンズ・ジャパンこどものひろばを訪問して

令和7年8月19日、NPO法人ピースウィンズ・ジャパンが運営し、珠洲市が協力する「こどものひろば」を見学しました。未就学児（保護者同伴）から無料で利用できる集いと遊びの場で、震災前は民間の（セレモニーホール）に変更を（×）を利用しています。「子ども達が安心して過ごせる場所」「多世代がつながる新たな交流拠点」として8月10日にプレオープンし、秋に改修工事、（クリスマス頃に）に正式オープンを予定しているそうです。受付を通り中に入ると、広々としたホールに映画上映、スクリーンを利用したコンピューターゲーム、身体や手先を使って遊べるおもちゃなどがあり、未就学児だけでなく夏休み中の小中学生まで20人ほどの子ども達と保護者で賑わっていました。

震災後、施設の閉鎖だけでなく子育て世代の転出も影響し、親子が家庭以外で人と触れ合う機会は減っているとのこと。それぞれ事情は異なりますが、場や時間を共にし、つながりを感じられることは大変貴重であり、地域の力になると感じました。（黒岡・武林）

派遣者ちょこっと瓦版

珠洲市に派遣された方に感想や課題などです。

2024年1月1日に発生した能登半島地震から1年半が経過し、同年9月27日の豪雨発生からもまもなく1年を迎えます。私は今回、武林さんと二人で珠洲市への災害支援活動に参加しました。珠洲市役所まで、金沢の自宅から車で片道約3時間かかります。気軽に通える距離ではありません。それでも、現地に行って、住民の方の思いや生活の様子、仮設住宅の実際などを自分の目で見て知りたいと思い参加しました。

私が珠洲を訪れたのは、今回が2度目です。初めての訪問は2024年の7月で、ちょうど「ささえ愛訪問」が開始した時期でした。保健師さんや社会福祉士さんと共に家庭訪問を行

い、傾いた電柱、瓦礫の山、亀裂の入った道などを目の当たりにしました。訪問先では「罹災証明書の結果が出ないために、家を解体することもできない」「仕事の再開ができず、朝から飲酒してしまう」などのお話を伺い、厳しい生活の様子を知りました。

その一方で、「水道が復旧したので避難先から戻ってきた。」「まだ不便だが、どうしても自宅に戻りたかった」と話してくださった高齢の方々の笑顔が忘れられません。生まれ育ったふるさとで暮らし続けたいという強い思いを教えてくださいました。

そして、誰もが「自分が決めた場所で自分らしく住み続ける」権利があり、それが実現できるように支えていくことがソーシャルワーカーとしての自分の役割だと実感しました。（黒岡）

今回の訪問では、前回と比べて道路の整備や建物の解体作業が進み、瓦礫の山も撤去されている一方で、更地になった跡地や田んぼに草が生い茂る風景も広がっていました。

珠洲焼の梱包支援のために訪問した際には「本当なら稲穂が実っている田んぼが、持ち主が珠洲を離れてしまったために今年は手入れされていない」とお聞きしました。

草に覆われた田んぼに胸が痛みましたが、一方で稲穂が実っている田んぼもあり、それは「ここに住み続ける」という住民の強い意志表明のように思えました。

そして、これからも自分の目と耳で現地の状況を確認し、住民の声に耳を傾けて、その声を起点とした復旧・復興支援について考えていきたいと思いました。

自分が決めた場所で、望む暮らしが実現できることを支えていけるように、引き続き訪問活動が続けていきたいと思います。（武林）



今年の秋は、能登には美しい日本の風景が残っていると感じさせてくれました。

この地に生きる人々の営みや夢や希望が、これからも続いてゆく願いと共に。



寺家地区の秋祭り（4地区 4 台のキリコを灯して）